

【報告④】

繁華街の形成と発展

初 田 亨*

目 次

1. 銀座煉瓦街の建設
2. 明治前期の銀座と日本橋地区
3. 明治につくられた土蔵造りの街並み
4. 洋風の街並みの出現
5. 座売りから陳列販売方式へ変わる商店
6. 街歩き（ウインドーショッピング）を楽しむ
7. 近隣型から広域型に変わる商店街
8. 都市の名所になった百貨店
9. 大衆の社交場・休息所としての喫茶店
10. 「商業銀座」から「歓楽境銀座」へ

1. 銀座煉瓦街の建設

銀座の繁栄を導くことになった出発は、日本で実施された最初の都市計画となった、銀座煉瓦街の建設から始まる。銀座煉瓦街の建設は、明治5年（1872）2月におきた大火を契機にして進められた。江戸時代にはそれほど繁華な街でなかった銀座が、これ以降、飛躍的に発展し、やがて日本で最も賑やかな場所になっていく。

煉瓦街建設前の銀座について、長谷川竹治郎は「むかしは日本橋を中心にして、京橋から新橋へかけては次第にその中心に遠く、家並も大分劣つたもので観世だの金春だのと能役者などの居宅があつたり、商店としては二位に落ちたもので、銀座四ヶ町に土蔵づくりはかぞへるほど、瓦葺きさへ少なく、コケラ葺きの家が多いくらゐでした」（資生堂編輯『銀座』1921年、資生堂化粧品部）と語っている。また、明治6年（1873）に刊行された「東京町名競」によれば、「銀座四丁」は関脇で、「尾張町三丁」が前頭の上位を占めているものの、新橋に近い「竹川町」「出雲町」は、前頭のずっと下のほうに位置している。

煉瓦街が建設される以前の銀座の街並みは、京橋に近い所はわずかに商店街らしい景観を

*工学院大学建築学科教授



図1 銀座煉瓦街（『明治大正建築写真聚覧』日本建築学会 1936）

保っていたが、新橋に近くなるほど寂しくなる状態であった。

2. 明治前期の銀座と日本橋地区

銀座煉瓦街が建設されてまもなく、明治16年（1883）から明治18年（1885）にかけて、東京の商店を描いた銅版画の冊子が多く出版されている。確認できたものだけでも6冊あり、694軒の商店が描かれている。そのうち、銀座の建物は72例、日本橋地区の建物は92例ある。

銅版画に掲載された商店の分布をみると、銀座では中央通りで京橋に近い側に多い。江戸時代の銀座の賑わいが、京橋に近い所で賑わっていたものの、新橋付近は寂しかったことを考えると、銀座煉瓦街ができた後も、場所による賑わいの傾向は、あまり変わらなかったことがわかる。

銀座の商店が取り扱っていた商品で目立つのが、洋物、舶来物の多いことである。銀座の商店の32%が洋物、舶来物を取り扱っているのに対して、日本橋地区では、19%に過ぎない。また、「問屋」であることを記している商店を見ると、逆に、日本橋地区の方が2倍位多い。日本橋地区には、江戸時代と同じように多くの問屋が位置していたのに対して、銀座には、洋物、舶来物など、新しい商品を取り扱う商店が多くあったことがわかる。



図2 日本橋付近の土蔵造りの街並み（『日本橋区史参考画帳』日本橋区 1937）

3. 明治につくられた土蔵造りの街並み

明治10年代の後半から20年代にかけて、東京には数多くの土蔵造りの店舗が建設されている。土蔵造りの建物は江戸時代にもみられたが、街並みを構成するほど多くの土蔵造りがみられるようになったのは、明治時代になってからである。

明治中期の東京に土蔵造りの街並みが生まれることになった直接的な理由は、明治14年（1881）に「東京市街ニ於テ、火災ノ延焼ヲ防クヘキ為」として、東京府知事と警視總監の名前で布達された「甲第27号」に起因している。「甲第27号」の内容は、主要な道路と水路を「防火の線路」と定め、この線路に面する家屋に対して、新築する建物はもとより、すでに建っている建物でも、煉瓦造か石造あるいは土蔵造りの3種類のいずれかで改造することを義務づけている。多くの人々が選んだのは土蔵造りで、その結果、東京に土蔵造りの街並みが誕生したのである。

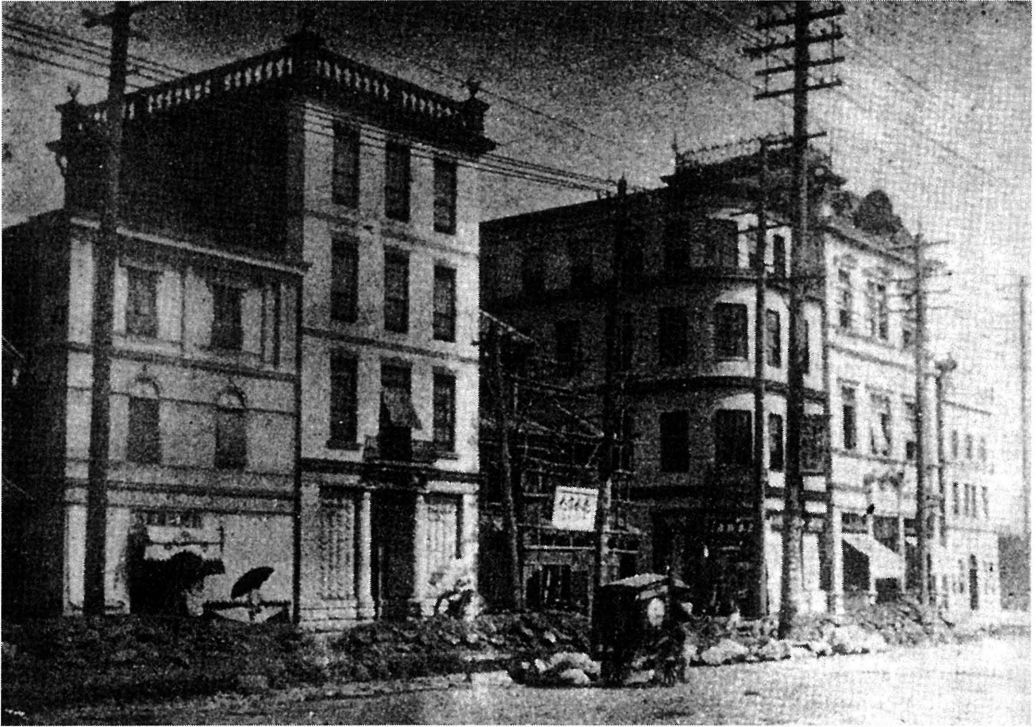


図3 市区改正速成計画後の日本橋大通り（『建築雑誌』1909年8月号）

4. 洋風の街並みの出現

その後、東京の街並みが大きく変わるのは、明治末期になってからである。明治39年（1906）から始められた市区改正の速成計画によって、神田・万世橋から京橋の間の道路が拡幅され、建物は改築するか曳家することになり、街並みは大きく変わった。万世橋から京橋の間は道路の西側のみ拡幅されたが、その結果、洋風の街並みが誕生している。

拡幅工事が終わりに近づいた明治40年（1907）の7月に、建築家の田邊淳吉がこの地域の建物を一軒一軒調べているが、街並みに占める建物の割合は、洋風の建物が93軒あるのに対して、和風の建物は99軒あった。しかも建直した建物だけで比べると、洋風の建物が多くなっているという（『建築雑誌』1909年8月号）。

また建物の高さも、3階建てや4階建てのものがみられる。明治中期から後期にかけて、2階建て黒漆喰の土蔵造りの街並みから、3、4階建てが入り混じる洋風の街並みへと変化していったのである。

5. 座売りから陳列販売方式へ変わる商店

市区改正の速成計画をきっかけに、店舗形式も、それまでの座売り方式から、陳列販売方式へと変わっていった。入口に紺暖簾をかけ、開け放された出入口の中で商人が畳の上に座って客を待ち、訪れた客の求めに応じて、商品を店の奥や蔵から出してきてみせるといった座売り方式の店舗から、商品を店に陳列しておき、客自らが好みの品物を自由に選ぶ陳列販売方式の店舗に変わったのである。

陳列販売方式の店舗では、ショーウィンドーを設け、客が下足のまま自由に店の中を出入りできる形式をとるようになっていった。

売主と客とが1対1で対応する座売り方式の店舗では、購入の目的がない客が店舗を訪れることはできなかったが、陳列販売方式の店舗はそれを可能にしたのである。また、陳列販売方式の店舗の出現は、火災によって店舗が焼失する危険性が少なくなったことをも示している。

6. 街歩き（ウィンドーショッピング）を楽しむ

店舗形式の座売り方式から陳列販売方式への変化は、商店がそれまでの特定の顧客だけを相手にしていたことから、不特定の客をも相手にし始めたことを示している。

陳列販売方式の店舗では、気に入った商品があるかどうかを客自身が選ぶので、店に入ったものの、気に入ったものがなければそのまま商店から出てくればよいのである。このことは逆に、買う目的がなくても商店に入ることができることを可能にした。時には、買う目的がなく店に入った客が、衝動買いすることもあるのである。人々は、買う目的がなくても、商店、さらにそのような商店が続く街並みの賑わいを、楽しむことができるようになっていったのである。

店舗を巡り歩きながら、街のにぎわう雰囲気を楽しむウィンドーショッピングができるようになったのである。このような人々の楽しみは、やがて大正時代の「銀ブラ」へと受け継がれ、昭和の初めには、全国各地の繁華街にみられるようになっていった。

人々は、都市生活の中に新しい楽しみ、街をぶらつく楽しみを発見したのである。人々のこのような楽しみは、交通機関の発達と共に拡大していった。



図4 昭和初期のウィンドウショッピング(資生堂蔵)

7. 近隣型から広域型に変わる商店街

各地の商店街・繁華街に、大きな影響を与えてきたのが銀座である。明治以降、銀座は飛躍的に発展し、昭和初期には「銀座」を名乗る商店街が各地に出現している。

銀座が大きく発展し始めた時期に当たる、明治35年（1902）には「東京市京橋区銀座附近戸別一覧図」が発行されている。ここには、2752例の銀座の商店・事業所が記されており、そのうち業種まで記されているものが1998例ある。ここから、銀座に多い商店・事業所を見ると、生活に関連する業種の商店・事業所が全体の3分の1、買回り品を販売する業種が4分の1を占め、これら二つで全体の6割近くあることがわかる。

生活に関連する業種が、その地域と密接な関係をもつ近隣型の商店・事業所といった性格をもっているのに対して、買回り品は、品物や価格などを比較検討してから買うことのできる商品で、前者が地域と密着した近隣型の特性をもつものに対して、後者は広域型の特性をもっている点に特徴がある。

銀座が大きく発展した明治後期には、銀座はすでに、広域型の商店街としての特性をもち始めていたことがわかる。

8. 都市の名所になった百貨店

日本に百貨店がつくられていったのは明治末期である。欧米の百貨店の客のほとんどは婦人客だけであるのに対して、日本の百貨店は、家族連れが訪れやすい施設をつくったことに特徴がある。その結果、日本の百貨店は、美術館や劇場を持ち、さらに食堂を充実させると共に、子供まで楽しめる屋上庭園をつくっていったのである。百貨店は、単に商品売る商店の枠をこえた都市施設として、誰もが自由に入ることのできる文化・娯楽施設、さらには都市の中の公園、休憩所としての役割を果たすようになっていったのである。

昭和になると百貨店は、人々から都市の中の名所としても認識されるようになっていく。この頃の東京市電気局による遊覧パ



図5 松屋銀座店（松屋蔵）

スのコースには、三越、松屋、松坂屋といった百貨店が、銀座、深川不動尊、清澄庭園、亀戸天神、浅草、上野公園、靖国神社、明治神宮、乃木神社、泉岳寺、芝公園、国会議事堂、桜田門、日比谷公園、二重橋などと共に組み込まれている。また昭和4年（1929）8月の朝日新聞には、百貨店が公園であり民衆の散歩道であるとまで書かれている。

百貨店は、都市の名所になっていくと共に、繁華街に欠くことのできない施設になっていったのである。

9. 大衆の社交場・休息所としての喫茶店

街歩きを楽しむ人々に、都市の中で自由に休むことのできる場、語らいの場を提供したのが喫茶店である。東京市の喫茶店については、明治後期から統計が残されており、その数をみると、明治30年（1897）から明治40年（1907）にかけて60から70位でほぼ一定しているが、以後大正10年（1921）位にかけて漸減している。ところが、関東大震災のあった翌大正13年（1924）から急増し、昭和2年（1927）には397店に、昭和7年（1932）には2056店と、関東大震災前年の64.25倍にもなっている。

喫茶店を監督する側にあった警視庁の保安課長によれば、この頃の喫茶店は、「珈琲や紅茶を飲みながら音楽を聴き、友達と談笑し、一寸した用談に利用する一種の大衆的社交場」（『中央公論』1938年7月号）に使われているという。このように使われていた喫茶店の急激な増加



図6 紫煙荘（『建築写真類聚 喫茶店の新構成 巻1』洪洋社 1934）

は、それだけ、都市の中を動きまわる人、まち歩きを楽しむ人が増加したことを示している。

当時の喫茶店の中には、道路側の外壁をすべてガラス張りとし、街を歩いている人から喫茶店の中が、喫茶店から街の様子が見えるようにしているものもある。まさに街は、演じる者と見物する者とが同時に存在する、舞台になっていったのである。

10. 「商業銀座」から「歓楽境銀座」へ

大正末期から昭和初期にかけて、「銀ブラ」を楽しんでいた石角春之助によれば、この頃の銀座は、劇場、デパート、ダンスホール、カフェ、喫茶店、飲食店などが台頭し、それまでの「商業銀座」から「歓楽境銀座」へと変わっていったという。

「商業銀座」から「歓楽境銀座」への変化は、商業空間に、娯楽性をもった遊興空間が組み込まれていったことを示している。江戸時代においては、日本橋界限など商店や問屋が集まった場所が都市の中心部にあっても、見せ物小屋や芝居小屋などの遊興空間は、橋のたもとの広小路や寺社境内、遊郭、芝居町など、都市の周辺に配置されていた。それに対して近代の都市は、これら遊興施設が商店街に取り込まれることによって、都市の中心部につくられるようになってきたのである。そこには、かつての遊興空間がもっていたような「悪所」のイメージもなくなり、家族連れが楽しめるような場にもなっていったのである。

明治後期に、人々が街歩きを楽しめるような都市がつくられていった後、昭和初期になって、街歩きを楽しむ人々が急激に増えていったのと共に、都市は、再び大きく変わっていったのである。明治後期に近世の都市から近代の都市に脱皮しはじめ、昭和初期に、現代の都市とほぼ同じような原型がつくられていったともいえる。